原著論文

高次脳機能障害と戦略的自己開示

――就労とジレンマに焦点を当てて――

澤　岡　友　輝

（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

本論文は，「見えない障害」とされる高次脳機能障害者が，どのようにその障害を他者に伝え，本人は何を考えて開示／非開示を選択しているのか明らかにすることを目的とする。これまで開示／非開示の問題をめぐって，性的少数者など＜見えない属性＞を持つ人々の研究が進められてきたが，社会制度も絡んだ高次脳機能障害者の自己開示については十分に研究されてこなかった。本論文では，高次脳機能障害と診断された２名に半構造化インタビューを行い，質的に分析した。その結果，本人らには就労に際して自己開示を行うことで「障害者雇用率制度のもとで職が得られる」，「理解が得られて働きやすくなる」などのメリットがあった。他方で，「採用に不利になる可能性がある」などのデメリットもあり，開示すべきかどうかというジレンマを抱えていたことがわかった。開示が本人の利益になるか，必要のある場合は開示するが，その詳細は伝えないなど，開示する状況や相手のことを考えて戦略的に対応していることが明らかになった。開示／非開示する属性に「障害」が加わることで，自己開示に「職を得る」ことが関係して戦略的に用いられていることがわかった。

キーワード：高次脳機能障害，自己開示，カミングアウト，見えない障害，ジレンマ

立命館人間科学研究，No.44，1-14，2022.

Ⅰ．はじめに

高次脳機能障害は，事故などによる脳損傷に起因する認知障害全般を指し，「見えない障害」とされる（河井他 2016）。障害の症状は，一般的に多くみられる「忘れ物が多い」「やる気が出ない」ことがあるうえ，日常生活における自立度も高い場合が多く，山田は障害の目視での判別が難しいと述べる（山田 2011）。本人や家族においては，高次脳機能障害が「見えない障害」であるがゆえに，症状によるものだけでなく周囲の無理解による困難も生じている。

これまで高次脳機能障害をめぐって，本人による著書のほかに，その家族や医療従事者，支援者の視点からの語りがあった。そこから見えてくるのは，周囲の無理解による情緒的ストレス，社会からの孤立など，生活全般に及ぶ負担を抱え込むことになるのは，障害を負った本人だけではないということ，家族もまたその一人であるということである（麦倉 2006）。麦倉は，周囲から理解を得られず孤立感を深め，周囲に支援を求めることを諦める家族も少なくないことを指摘している。その際，高次脳機能障害にともなう「行動と感情の障害」などの感情面の症状が家族の苦悩に繋がっている可能性も指摘されてきた（朝比奈 2014）。また，周囲から理解され難く，ときには軽蔑的な眼差しを受けることもある高次脳機能障害者が置かれてきた「生活のしづらさ」を，ソーシャルワーカーの立場から記述した研究もある（林 2014）。すなわち，高次脳機能障害をめぐって，これまでの先行研

究では主に，本人が抱える苦悩と，その周囲の人間（家族や支援者）の苦悩という二つの苦悩の重なり合いが語られてきたといえる。

ただこれら先行研究は，高次脳機能障害者が抱える生活の困難を明らかにしただけにとどまっている。生活に困難があることはわかったが，そこから高次脳機能障害者がその生活の困難を乗り越えようとするときに，どうしてもぶつからざるを得ない「自己開示」については，これまでの研究において，そこまで深められてこなかった。実際，先行研究では，高次脳機能障害者が就労を継続できた背景に，支援者への相談があったことが指摘されているが（小泉・八重田 2017），そこから支援者との関係を越えて，職場の人々との間の新たな関係構築に至るまでの経緯については説明されていない。そこには，「自己開示」という困難な契機が控えていることは言うまでもないだろう。

高次脳機能障害は「見えない障害」であるため，自己開示するかしないかという選択の問題が常につきまとうからである。しかしその選択がどのようなプロセスを経て決定されるのかは，なかなか捉えることが難しい。本研究では，榎本が定義した「自己開示」（榎本 1997）と森山が性的少数者をめぐって考察した「カミングアウト」の議論を（森山 2010）をふまえ，「高次脳機能障害を他者に伝えること」を「自己開示」[1]と定義する。この場合の「自己開示」には，単に高次脳機能障害の一般的な説明だけでなく，障害を抱えるひとりひとりが感じる個別的な困難の伝達も含められている。そしてまた，「自己開示」しないことも，「自己開示」をめぐる一つの積極的な選択として，捉え直してみたい。というのも，他者に「自己開示」することで理解を得られることもあれば，不利益を被る可能性もあるからである。周囲から理解が得られにくく「見えない障害」のある高次脳機能障害者が，他者に障害を伝えるか否かの選択で抱える葛藤は，複雑で繊細な問題である。そこでは，スティグマを「人の信頼をひどく失わせるような属性ではなく関係を表現する言葉」だとして論じたゴフマン（1963=2001: 16）の議論とも重なる部分が多いだろう。障害について，ここでは本人の属性が問題なのではなく，本人が行う情報管理／操作の問題が重要なものとなる。自己開示による障害の明示は免責[2]だけではなく，様々な意図を持ち，自己開示する自身や自己開示を受ける側に影響をもたらすことが研究で示されてきた。実際，ゴフマンによれば，「自己呈示」（ここでは「自己開示」）には戦術が含まれるという（Goffman 1959=1974）。

これまでも，軽度身体障害者と精神障害者における戦略的呈示の問題については，議論されてきた[3]。しかし，本人の状況に応じて戦略的に自己開示を行うという，その戦略性については，高次脳機能障害者もまた同様である。

障害に限らず，自らの属性の開示に関しては，性的少数者をめぐる研究（三部 2014; 砂川 2018）や在日朝鮮人をめぐる研究（金 1999）の蓄積が

1）自己開示（self-disclosure）という言葉を早い段階で学術的に論じたものに，ジュラードの『透明なる自己』（Jourard 1971=1974）がある。榎本（1997）は自分の性格や身体的特徴，考えていることなど「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」と定義している。森山（2010）は性的少数者が用いるカミングアウトについて，現在の用法が「自身の特徴や属性，特に差別や抑圧の「理由」となるようなそれについて，今までに明かしていない情報を他者に伝達すること」だと述べている。

2）例えば，パーソンズ（1951=1974）は病人役割について，病気であることが逸脱であるとされるならそれは本人に責任があるのではないことが区別されなければならないと説明している。

3）例えば，太田は，可視的な軽度身体障害者を対象とした研究において，外から判別が容易であり，あえて開示する必要はなくても，他者との関係性に基づくさまざまな判断（例えば，「自信」をもつこと）を通じて障害の開示を選択するケースを記述している（太田 2007）。また，横山は，見えにくい障害の一つである精神障害をもつ人々が，慎重かつ選択的に自己開示するケースを記述している（横山他 2014）。

ある。「カミングアウト」あるいは開示／非開示をめぐって，これまで他者との関係性や自分のアイデンティティに誇りを持つことなどが論じられてきた。砂川は，性的少数者の「カミングアウト」を他者との絆を深める行為でもあると説明する（砂川編 2007）。他方，被差別部落民では，名乗り出て可視化されることで，他者との対等な新しい関係をつくる一方，相手がもつ偏見・誤解を強める場合もある（石元 2010）。性的少数者では，可視化・不可視化のいずれにもリスクと負担があり，可視性をめぐるジレンマを日々経験していると指摘される（三部 2014）。軽度身体障害者でも本人は障害を開示すれば他者から配慮を得ることはできるが，「努力の放棄」「やる気がない」などの批判を受けることもあると田垣は指摘している（田垣編 2006）。また，別の研究によれば痙攣性発声障害のある者は，生活場面で症状が可視化されても周囲から病気と認識されないため，他者から何のためらいもなくあからさまな否定的反応を示されることがあるという（野島 2015）。開示／非開示する者を対象とした先行研究から，開示によって本人の属性が他者に詳らかになった場合にもメリットとデメリットがあり，非開示にしていてもメリットとデメリットがある。「見えない障害」である高次脳機能障害者の自己開示にはどのようなメリットとデメリットがあり，ジレンマがあるのだろうか。また，そこで本人たちはどのようなリスクを背負い，開示／非開示を選択しているのだろうか。

高次脳機能障害も見えにくいものであるが，「障害」である。日本には障害者雇用率制度があり，障害を開示することによって職を得られるという場合がある。他方，性的少数者が「カミングアウト」によって性的指向や困難などが他者に伝わり，就学や就労で理解や配慮を得ることはできるかもしれないが，社会制度を通して職を得るということはない（このことからも，高次脳機能障害について「メリット」と「デメリット」で語る必要性はある）。その「カミングアウト」に似た行為で「自己開示」について榎本が，自分の性格や身体的特徴，経験や境遇，考えていることなど自己の性質や状態をあらわす事柄を他者に話すことであると説明している（榎本 1997: iv）。「自己開示」は「カミングアウト」より伝える内容に個人の詳細な情報を含む。高次脳機能障害が中途に生じた障害であり，障害者雇用率制度のもとで自らの属性を開示して説明する場合があることに鑑みると，高次脳機能障害者の場合には「カミングアウト」と言うより「自己開示」と言う方が適当だと考える。また，精神障害は精神障害者保健福祉手帳という制度で障害は可視化されるが，高次脳機能障害は制度上も「見えない障害」とされる。障害者採用で雇用側へ提示する精神障害者保健福祉手帳に記載があるのは障害等級（1～3級）のみであり，「高次脳機能障害」の名称は記載されていない。高次脳機能障害者の就労場面における自己開示には社会制度が絡んでいる場合もあり，じっさいに制度を通せば本人は職を得られることがある。本研究が取り組む「自己開示」には，そうした社会的・制度的・経済的な背景が含まれている。

本研究の目的は，インタビュー調査を通じて，高次脳機能障害者がどのように障害を他者に伝え，本人は何を考えて開示／非開示を選択しているのか明らかにすることである。就労場面における自己開示の選択に，「見えない障害」である高次脳機能障害者は，誰にどう伝え，何を考えて開示／非開示を選択し，使い分けているのか。高次脳機能障害者の実情に新たな側面を提示し，自己開示にある問題の一端を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1. 研究参加者

2019年9月当時の年齢が20代で，高次脳機能障害と診断され，病識をもつ者[4]2名を研究参加者とした。2名には，高次脳機能障害を有してから経過した年数の違い（A氏3年，B氏19年）がある。高次脳機能障害の症状[5]は，本人の就労やその継続に困難を生ずるが，就労における障害の開示／非開示の事例として，就労するタイミングにある者（A氏）と就労経験を有する者（B氏）との差異が分析する上でのポイントとなった。

2. データ収集方法

高次脳機能障害の人たちの自己開示に関して，インタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。高次脳機能障害の患者会，2つの家族会と高次脳機能障害者支援センターに，研究参加者の紹介を依頼した。その際，障害の認識がない者を除き，現在の年齢が20代で高次脳機能障害と診断され病識をもつ者を条件とした。紹介された研究参加者には研究概要を説明し，同意を得ることのできた2名にインタビューを行った。

(1) インタビューガイドの具体的内容

①高次脳機能障害について自己開示するかしないか悩んだことはありますか。どのような思いかお聞かせください。

②あなたが自己開示するのはどのような時ですか。それはなぜなのかお聞かせください。

③高次脳機能障害について，開示に至った状況をお聞かせください。

④あなたが自己開示しないのはどのような時ですか。それはなぜなのかお聞かせください。

⑤高次脳機能障害について，開示しなかった状況をお聞かせください。

3. データ収集期間

データ収集期間は2019年9月12日および9月19日である。

4. 分析方法

研究参加者に自己開示についてインタビューし，得られた語りを逐語録にした。本研究の主題にかかわる「自己開示する／しない選択にどのような配慮があったのか，誰にどう伝えるのか，伝達方法に使い分けがあったのか」を含む語りに注目した。具体的には，A氏とB氏の語りから，自己開示をめぐる行動の意図，心の動きがうかがえる語りをピックアップし，それらを，それぞれの差異に注目して考察した。

5. 倫理的配慮

研究参加者へはインタビュー前に文書と口頭で研究趣旨を説明し，同意を得た。インタビュー途中やインタビュー終了後でも，研究参加への同意撤回が可能であり，研究参加者に対して不利益がないことを説明した。語る内容はトラウマティックな内容であることも配慮し，参加者の体調を伺いながらインタビューを行った。なお本研究は，立命館大学における人を対象とする研究倫理審査に申請し承認を受けて実施した（衣笠 - 人 -2019-35）。

Ⅲ．結果

1. 研究参加者の概要

2019年9月，研究参加者2名にインタビュー

4）「病識をもつ者」とは，高次脳機能障害を否定せず，症状による影響が生じていることなどに気づいている者とした。

5）高次脳機能障害の主な症状に，記憶障害（新しく何かを覚えられないなど），注意障害（集中力がないなど），遂行機能障害（物事を計画して実行することができないなど），判断力の低下・易疲労性（精神的に疲れやすい）などがある（橋本2007）。

を行った。A 氏は大学生，B 氏は就労継続支援 A 型に通所している（2019 年 9 月当時）。A 氏，B 氏とも障害の発生を契機にてんかんが併存している。

インタビューは各 1 回ずつ行い，総時間は A 氏が 129 分，B 氏が 163 分であった。生データにある（　）は語りの前後の文脈を踏まえた筆者による補足である。考察に関する語りには下線をつけた。

2. A 氏のケース

A 氏は 21 歳男性である。大学 1 回生 19 歳のときに脳出血を発症し，高次脳機能障害と診断された。発症後は入院して大学を休学し，次年度から再度 1 回生として復学した。大学の支援課には高次脳機能障害を伝えており，困っていることや必要な配慮を大学の教員にも相談している。発症後にアルバイトをしようとするが，採用面接の際に障害の開示によって断られたことがあった。その後は障害について採用面接の際に伝えず，スーパーマーケットでアルバイトをし，2, 3 週間後に開示した。自らも，スケジュールをうまくたてられないことを認識しており，時々，自身の記憶が正しいかどうか疑問に思うことがある。

A 氏：（大学で）いきなり初対面の人に言えないんで。いきなりは難しいですけど，やっぱ回数重ねるってことで，つながり持つじゃないですか。それに自分自身も相手も，お互いの事情，内面事情を少しでも理解できるって機会があれば，それは話していこうって思ってます。相手の器が知りたいっていう言い方になっちゃうんですけど。要はそういう人を受け入れる人間か受け入れられない人間か，っていうのがまずわからないっていうのが。<u>僕のあれですと，障害を持ってるけど，目に見えにくいっていうこともあって，いきなり打ち明けたら，打ち明けても見えないっていうのが一つですし。</u>もう一つはもし相手の人が，障害者っていう人に対して，差別的な偏見を持ってたら，それ以後付き合いできなくなる。（中略）ちょっと相手のその信条といいますかね。理解できる人だなって思ったら，話すっていう形にしてますね。

A 氏は，大学で初対面の相手には自身に高次脳機能障害があることを伝えられないが，人とのかかわりのなかで相手が障害を理解できると感じたら高次脳機能障害があることを打ち明けようと思っていた。このときネックになっているのが高次脳機能障害の「目に見えにくい」性質である。「打ち明けても見えない」がゆえに「いきなり打ち明け」るわけにはいかないということを A 氏は語った。

ここで A 氏が抱えていたのは，開示によって他者との関係が損なわれる不安である。しかし，高次脳機能障害があることを自己開示しないままだと，周りに自分の症状を知る人がいなくなってしまう。そうなると何かあった時に他者から助けが得られないかもしれないという不安があった。

A 氏：長年付き合いのあった子も居たんであの高校から付き合いがあって同じ大学に進んだ子もいるんで，仲良かったっていうのもあってか，今以上に付き合い大事にしたいなっていうのもあって。極端な話，捨てられる，（捨てられ）たとかそういうわけではないんで，だからより，こういう症状があるから何かしらあったときに，まあ助けてもらえるというか。少しでもいいから，なにかのために，役に立つといいますか。例えば僕が急に，倒れましたと。そういう時にまあ友達は，ちゃんと大丈夫かって声かけるかってちゃんと信じたうえで，それを伝えたんですね。正直，まったく初対面の子だと。パニック起こしたり，場合によっては見捨てるってこともあるんじゃないかと。普通の大学生活送ってて急に，高次（脳）機能障害とか含めて障害者枠のなかに入っ

た。それに対して友人が差別したり，悪口を日ごろから言われたりする，相手してくれないっていう，そういうふうな心配があって。

A 氏は，開示をするに際して，他者との関係が損なわれるデメリットと，困ったときに助けが得られるメリットを考えている。次は自己開示を選択した A 氏の語りである。

A 氏：理解してほしいってこっちが思って伝えてても，向こうから見たら「いや，そういうふうには見えない」。（障害を）持ってるんなら，もっと重いものがなにかしら眼で視えるってみんなは言うんで。理解してもらえないのは残念だなって反面，嬉しかったって言いますか。よかったのはその，じゃあその症状持ってるから，縁切るね，とか。そんなんじゃなかった。友人がおそらく，何かしら差別じゃないですけど。下手すると悪口を日ごろから言われたりする，場合によったら相手してくれないっていう，そういうふうな心配があって。実際はそれの逆だったんで。受け入れる，というか。今までと同じような友人の付き合いとして，「あんま変わらないんじゃないの」と。「雰囲気，あんまり変わってないよ」とか。「普通にそうは見えないで」って。（中略）できる限りのことを言ったら，相談乗ってくれるってことも，言ってくれたんで。安心して大学生活を送れるかなって。

A 氏は受傷後，障害があることを友人に伝えるが，それ（高次脳機能障害）が障害であることをなかなか理解してもらえないことが残念だと語っている。それでも，「あんま変わらないんじゃないの」と友人から言われたこと，障害発生前と同じように友人と付き合えたことなどは，A 氏にとっては嬉しかったようだ。またその自己開示が周囲に受け入れられたと感じているのがうかがえる。

また A 氏は現在，大学に通いながらアルバイトを続けているが，そのアルバイトを始めるにあたって，そこでもまた自己開示をどうするのかという問題に直面する。それは大学での人間関係とは異なり，より複雑な様相を示していた。

A 氏：初日とかは（高次脳機能障害があることは）話さなかったです。働いてからだいたい 2，3 週間後に，まず店長から（伝えて次に）副店長さんにって形でつなげて，そのうち親しくなったりして。大学生同士とか，少し年配の方とか。少し話したりしてて。倒れたら，対処してほしいって，こっちから進んで頼む形で。

筆者：面接のときは話さなかったと言われてたんですが，それはどうしてなんですか。

A 氏：ほかのバイトの募集のときに，「こういうの（高次脳機能障害）をちょっと持ってます」って話すと，「結構です」っていうふうに，差別的（な）というか，嫌ってるといいますか，その向こう側が働ける日程に診察・診断っていうのがどうしてもつきものなんで，そういうのに対して，お店側の立場としては，それは困るってことで，だから受け入れられないっていうふうに言われましたね。（そういう経験があったから，次は）言わずにちょっとやってみようと，落ち着いたくらいに（障害を）伝えてみると。（その時は）正直，傷ついたと同時にまあそういうふうな態度とるんだなっていう。少し残念だなと。

A 氏は診察の日程で働けない日があるため，アルバイトの採用面接で，そのことを伝える必要があった。しかし，その結果，障害の有無を理由に採用を断られたことがあった。A 氏は以降，就労に際して障害をすぐには伝えず，働き始めて落ち着いたのを見計らって障害を伝えることにしたという。

ここでも A 氏は開示のメリットとデメリットを考えて，開示を選択したことがうかがえる。

3. B 氏のケース

B氏は28歳男性である。10歳の時に交通事故で頭部外傷を負い，17歳で高次脳機能障害があることが判明した。10歳の交通事故後から，意識に障害はないが不快感が生じる「単純部分発作」を自覚したが，てんかんの診断は受けていなかったという。高校生のときから物忘れが多い自覚はあったといい，友人から「何回も同じ話をする」，「同じことを聞く」などの指摘を受けることがあったという。高校在学中にてんかんの大発作が起きて入院し，検査をして高次脳機能障害の診断を受けた。本人は高校で「後遺症」という言葉で症状の説明をする機会はあった。高校卒業後，大学へ進学したB氏は，3回生の12月に意識の喪失をともなう「複雑部分発作」が起こるようになったという。B氏は高次脳機能障害の症状として記憶障害と遂行機能障害を認識している。

B氏もまた，A氏と同様，大学でゼミの教員や友人に自己開示している。

筆者：（高次脳機能障害を大学で）友人や教員に話すタイミングはあったでしょうか。

B氏：教員は，ゼミ，いやもしかしたらZ先生だけかな，教員は。（中略）ゼミ以外では喋ってないんじゃないかな。友人には喋ってるんですけど，「いや，普通やから大丈夫やで」っていうような。向こうは別に，よかれと思って言ってるんでしょうけど。

B氏は自己開示後に，友人が「よかれと思って言っ」たという「普通やから」という言葉に引っかかっている。実際，自己開示をするに至ったその背景が以下に述べられている。

B氏：サークルで速い話についていけない。っていうところですかね。同じサークル内の仲いい子らに，言ったけど（わかってもらえない）。（中略）記憶（障害）もあるんやけど，（展開の速い話の）スピードについていけないって方で言ってるんですけど。でもまあ普通に見えるんで。っていう感じでしたかね。まあどうしてくれっていうよりも悩みを聞いてほしかった。感じだったんじゃないかなと。

B氏は，他者には「普通」に見えるので悩みを発言しても「悩み」として理解されない経験をしていた。

B氏：（友人へ高次脳機能障害について）主張したことが一回あって，「B，こうなってるで」（視界が狭まって目の前しか見えていないようなジェスチャをしながら）っていうふうに，友達に言われたんです。ああ，まあ，そう見えても，ああそうか（笑）っていう感じでしたね。（中略）それに対して，逆ギレするわけではなく，まあ伝わらないな，とは思いました。伝わらないことに対する諦め。でまあ次第に，友人とはまあやや距離を取って付き合うように，そっからどんどん高次脳（機能障害）の友人と接することが多くなったり。で，学科を替わってからはちょっと，高次脳（機能障害）や他の障害を持った方との付き合いの方がほとんどですかね。

B氏は自己開示をしたものの，友人から思ったようには理解が得られなかった経験を語った。このとき「伝わらないことに対する諦め」を感じたという。その後，B氏の交友関係は変わってゆき，障害のある人との付き合いが多くなっていったという。

B氏は大学卒業後，障害者採用で就労した。A氏と異なり，面接の段階で自己開示したわけだが，「高次脳機能障害」の名称は使わず，記憶障害についてのみ説明したという。

B氏：（自己開示をした）一番大きな理由は，障害者採用だからです。で，まあ高次脳機能障害って言葉を使わなかった。記憶障害だけでいきましたね。もうそれが伝わりやすいかなって。かつ，高次脳機

能障害で調べたら，いろんな症状出てくるじゃないですか。（自分が認識しているのは記憶障害と遂行機能障害なので，高次脳機能障害にいろんな症状があることを知ってもらう）よりは（笑）まあもしかしたらまあ採用（者）が調べてるかもしれないですけど。高次脳機能障害って言ったら，記憶障害だけじゃないと思われるかもしれない。まあ他にいろんな症状あるじゃないですか。それへの，採用者のまあ，アクセスを防ぐため（笑）記憶障害って言ったらわかりやすいかなって。

筆者：そのアクセスは自分にとって不利に働くものと感じた。

B氏：はい，そうです。

B氏は高次脳機能障害の症状として，記憶障害と遂行機能障害を認識している。ただし高次脳機能障害にはそれ以外にもさまざまな症状がある。「高次脳機能障害って言ったら，記憶障害だけじゃないと思われるかもしれない」と，雇用者に疑念を持たれないために（そして，その結果，不採用にならないために），記憶障害だけを開示したという。

B氏：まあもともと障害者枠の入社ってのは（会社の人は）知ってはいはるんですけど。同じフロアの人，やっぱり伝えた方が楽になりますね。気持ちが。その紙を渡したから理解しろっていう感じではない。（その紙には）メモを取らしてくださいってワードは入っています。でもそれだから楽になれるわけではきっとない。（中略）メモ取らしてもらうためってわけじゃなく。あの「さっき言ったやん」とかそういうのが怖かったんやと思います。メモを取れるようになることっていうよりも，その職務上高次脳（機能障害）とかするような，結構あるだろうと思って，最初に告知したんだろうな。とは思いますね。けど私はまあちょっと不安があるんで，先に言っちゃう。ことでまあ不安，その不安が少しマシになるんじゃないかなと。

B氏は，職場で高次脳機能障害の症状である記憶障害で生じた困難に対して，他者から指摘されるのが怖かったと語った。記憶障害の対策として行っている「メモを取ること」を最初に伝えることで心労の軽減を図っているのがうかがえる。

またB氏は，大学時代にもアルバイトとして働く際，「高次脳機能障害」があることを伝えず，「てんかん」を選択的に開示している。

B氏：大学のアルバイトのときはてんかんしか伝えなかったです。その時あの，今のような発作じゃなくって，半年に一回くらい大きめの発作が起きるというような。（だから）頻度が少ないほうだけ伝えて，高次脳（機能障害）に関することは全く言ってないです。やはりその採用の時だったんで，いくつも障害を言うとちょっとあれかなって（笑）。（中略）（面接を受けたところは）知的障害のグループホームなんですが，そこでアルバイトしたいなと思って，まああえて言う必要がないというのと，まあ（障害の開示で）採用に不利にはまあなる可能性はあるかなという感じで，てんかんも言って，高次脳（機能障害）の方も言って，でちょっと重すぎるかなって。向こうの気持ち的に（笑）。

B氏は，アルバイト採用面接の際に，時々起こる「てんかん」について伝えたが，高次脳機能障害があることは伝えなかった。これらのことから，B氏は職場で働くにあたって，その職場環境や労働内容に応じて，高次脳機能障害を開示する・しないだけでなく，開示するとしても，どこまで開示するかという戦略的な選択を行っていることがうかがえる。

Ⅳ．考察

(1) 高次脳機能障害の慎重な開示／非開示

A氏とB氏の語りから見えてくる高次脳機能

障害の開示／非開示をめぐる諸問題について，以下に考察を加えていきたい。

まず，A 氏は大学で高次脳機能障害を開示する上で，相手の理解の度合いや信条などを観察していたが，ここにも開示をめぐる戦略的な選択が働いていたことがわかるだろう。

開示後に差別や偏見を受ける可能性がある。そうした対人関係のトラブルを避ける必要から，A 氏は誰にでも開示をするというわけではない。このことを，「相手の器が知りたいっていう言い方になっちゃうんですけど。要はそういう人を受け入れる人間か受け入れられない人間か」という言葉で A 氏は説明している。

ここで問題になっているのは，開示後に予想されうる人間関係の変化に対する不安とその予防である。例えば，砂川は，性的少数者が，この人ならわかってもらえるだろうと思って伝えたのに，予想外の拒絶に直面すると，相手のイメージが変わり，さらにそれが相互に起きていた時はいっそう関係性が揺らぐと説明している（砂川 2018: 157）。つまり，自己開示の前後で人間関係が変化する可能性があるのだ。

他方で，B 氏にとって自己開示の選択には，自らの症状を他者に理解してもらうだけでなく，自身の心労を軽減するという意図があったことが述べられていた。（「先に言っちゃうことでまあ不安，その不安が少しマシになるんじゃないかなと」）。つまり自己開示しないでいることにもその後の人間関係で様々なトラブルを抱える不安があり，自己開示する場合も，しない場合も，人間関係の変化による不安はつきものなのである。

A 氏，B 氏ともに，障害への理解を求めた自己開示が語られていた。いずれの場合も，開示する状況や相手を考えて，自らの高次脳機能障害を伝えている。大学や職場など，自らが所属する場で自己開示をおこなうことには，そこでの人間関係が壊れてしまうデメリットの可能性があるにしても，「他者の理解を得る」必要がある場合もある。他者から理解と助力を得るというメリットが，予想されうるデメリットよりも高ければ，開示を選択するに至ると考えられる。高次脳機能障害の自己開示をめぐる戦略的な選択について，ひとまずは，そのようなメリットとデメリットをめぐる駆け引きとしてとらえることができるだろう。

ところで，A 氏と B 氏の語りからは，非開示を選択する場合にも，開示の場合と同様に，さまざまな戦略的な選択が働いていることがわかる。非開示については，A 氏，B 氏ともに採用面接の場面で選択されていた。

A 氏はアルバイト採用面接時点では開示せず，採用後に時間が経ってから開示している。過去に障害を開示したことで不採用になったことから，面接では障害を伝えず，後で自発的に開示するようになったという。障害を開示せずにアルバイトを続けるわけではなく，開示することで周囲に自分のことを知る者が増えるなど本人の利益になる。このことは本人の利益だけでなく，周囲にとっても「何かわからないことには原因がある」と知る利益になるだろう。A 氏は場面に応じて開示／非開示を選択していると考えられる。言うか言うまいかの判断は，場面に応じて選択される。そのような戦略的な選択を A 氏は採用していた。

他方，B 氏は，障害者雇用枠の採用面接で，自身の高次脳機能障害については非開示にしたが，「てんかん」や「記憶障害」については，職場に応じて開示している。障害者採用の応募者は，身体障害者手帳，療育手帳，精神障害者保健福祉手帳を有する必要があり，雇用者も国が定める障害者雇用率を満たすために障害者手帳を確認しなくてはならない。しかし，障害者採用の際に雇用側に提示する精神障害者保健福祉手帳に記載があるのは障害等級（1 ～ 3 級）のみであり，「高次脳機能障害」の名称は記載がな

い。そのため,「高次脳機能障害」など障害の名称にかかわる開示／非開示は本人の任意となっている。じっさいにＢ氏は採用者に高次脳機能障害の症状の一つである「記憶障害」については開示したが,「高次脳機能障害」の言葉は使わないようにした。高次脳機能障害を知られることで採用に不利になる可能性があったからである。つまり，開示には，するか／しないかだけではなく, どこまでするか, どこからはしないか, という程度の問題もかかわってくる。とりわけ障害者雇用率制度を利用して，高次脳機能障害者が就職する場合，開示／非開示の有無だけでなく，開示／非開示の程度をめぐってもまた戦略的な選択が働いていることが，このことからわかるだろう。

Ａ氏，Ｂ氏ともに，就労する際は雇用者に高次脳機能障害の説明を具体的にはせず，就業後に徐々に伝えるなど程度を考えて開示している。高次脳機能障害の開示／非開示はどちらも慎重に行われ，自身の情報を管理しようとする姿勢がうかがえた。「高次脳機能障害という属性や症状を初めに伝えたら警戒されてしまうかもしれないこと」が本人の不利益になると認識し，場面と状況で開示／非開示を使い分けているのである。

(2) 見えない障害を開示／非開示して生活する

Ａ氏，Ｂ氏ともに，障害の開示をして理解されなかった過去をもっている。両者ともに開示をした相手から「普通だから」と言われた経験がある。高次脳機能障害の症状は，怒りやすい，疲れやすい，忘れ物が多いなど，障害のない人にも共通するものが多い。Ｂ氏がその症状を周囲に「悩み」として話しても，周囲からすれば普通のことなので,「本人の性格によるもの」などと誤解され,「悩み」としては受け止めてもらえなかった。

実際，生活のなかで障害の症状が現れない場合には，高次脳機能障害者は障害のない人間とほとんど同じ生活を送っている。そこで本人は，生活の様々な局面で，高次脳機能障害の症状が現れないよう，さまざまな工夫や対策を行っていることがある。これは軽度障害者に多く見られる経験でもある（秋風 2013)。

ここで，他の軽度障害者の多くと異なるのは，高次脳機能障害者には身体的特徴がなく，その症状の一部は障害のない人にも共通する点である。理解を求めても,「見えない障害」に対する理解はなかなか得られない。高次脳機能障害者が，怒りやすい，忘れやすいなど，障害のない誰にでもある症状を示しても，それが障害によるものであるとして周囲から認識されることはほとんどないからである。周囲にとって普通なことでも本人には困りごとである。なかなか共有しづらい。しかし，完全に理解してもらうことは不可能でも,「どうしてくれっていうよりも悩みを聞いてほし」い時もある。

情報の管理／操作に関して，ゴフマンは自らの属性が見えないようにふるまう「パッシング」について論じている（Goffman 1963=2001: 127)。例えば，顔にあざのある女性たちを対象とした研究では，本人はそのあざを「パッシング」して生活することで, 就職や対人関係で生じる様々な問題に対応していることが指摘されている (西倉 2009)。「見えない障害」である高次脳機能障害者もまた，症状が現れても，それは誰にでも起こることであるとして,「普通」を装うことで,「パッシング」することも可能である。しかし，その度合いや程度が甚だしい場合がある。そうなると，周囲が違和感を抱き．本人が「パッシング」を続けるのが難しくなることもあるだろう。また，配慮や助けが必要である場合には非開示のままでいることよりも病気／障害として周囲に説明する方が好ましい場合もある。高次脳機能障害者にとって,「パッシング」が望ましい場合もあれば，それが原因で困る状況に陥る

ことにもなりかねないのである。一見，普通なのに，ある局面では「普通」の行動を当たり前にできないがゆえに，他者から理解を得られず，軽蔑的な言動を受けやすいのが，高次脳機能障害者の「生活のしづらさ」(林 2014) だと言える。高次脳機能障害者はパッシングできる／できない場面があることで生活がさらに複雑になっているのである。

(3) 戦略的自己開示と不可視性のジレンマ

A 氏と B 氏は自己開示に伴うジレンマを経験していた。開示／非開示のそれぞれに利益と不利益が絡み，どちらを選んでも多かれ少なかれ何らかのリスクを背負うことになるが，最終的には，本人がよいと思う方を選択することになる。

A 氏は，開示しなければ周囲に誰も自分の高次脳機能障害を知る者がいないがゆえに，困ったときに望ましい助力が周囲から得られなくなる可能性がある。しかし，開示によって他者との関係性が損なわれる不安もまた大きい。A 氏は，「非開示でいることの不安」と「他者との関係性が変化することの不安」との間でジレンマを感じていた。

また，A 氏も B 氏も，採用に不利になるかもしれないと感じてアルバイトの採用面接では高次脳機能障害があることを非開示にした。ここではいずれも「非開示でいることの不安」と「職が得られなくなる可能性」との間でジレンマを感じていた。

ただし，B 氏は「頻度が少ないほう（てんかん）だけ伝えて，高次脳（機能障害）に関することは全く言」わない方法を採用した。「いくつも障害を言うとちょっとあれかな」と語っているように，「てんかん」と「高次脳機能障害」を場面に応じて，選択して開示していた。自己開示をおこなうにあたって，高次脳機能障害に比べて認知度の高いと思われるてんかんが選択されたのは，本人が語っていたように，てんかん発作の頻度が少ないからだけではないだろう。他にも，相手に伝わりやすいからなどの理由も考えられるはずだ。属性の開示について，その開示が相手に及ぼすさまざまな反応を，機能的，功利的な側面だけでなく，感覚的，偶然的な選択としても見ていく必要があるだろう。

高次脳機能障害は，障害そのものに困難がある以上に，他者への伝達しにくさに，その困難さの多くがあると言える。障害をめぐるさまざまなジレンマもこのことに関わっている。それはさまざまな利害関係，メリットとデメリットの駆け引きとして語りなおすこともできるだろう。実際，高次脳機能障害を伝えることで，（障害者雇用率制度を利用して）職が得られる，他者による理解が得られて働きやすくなるなどのメリットがある。他方，障害が理由で職が得られない，他者との関係が損なわれるなどのデメリットもみられる。自己開示のジレンマとは，これらのメリットとデメリットの間で抱えるものであると考える。

V．結論

性的少数者の「カミングアウト」については，その開示戦略・多様な動機・社会的関係をめぐってさまざまな議論がなされてきたが（Orne 2011），高次脳機能障害者の自己開示についても，特有の開示戦略，多様な動機，社会的関係を考察することができる。

自己開示は誰にでも行うものではない。心理的な問題に目を向けるなら，障害に対する相手の理解の程度を観察し，その人と関係を重ねていくなかで，伝えてもよいと思ったときに症状を開示するという長いプロセスがそこには介在している。

しかし，「障害に理解がある」と見込んだ相手でも，理解してもらえないことがある。その際，

「友人に理解してもらえないのは残念な反面，嬉しくもある」と「友達に伝わらなくて諦める」経験が語られた。短時間のインタビュー調査ではあったが，ふたりの語りからは，開示の困難さ（メリットとデメリット）をめぐって，さまざまな感情の揺れを見出すことができた。周囲の者に伝える際には，開示で他者との関係性の変化が生じるおそれがある一方で，非開示にすることで自分のことを知る者が周囲に居ない不安はあるが，助けが得られるなど双方の間でジレンマを抱えていた。

自己開示が自身の誇りや他者による承認など心理的な問題だけではなく，A氏とB氏は，生活にかかわる実際的な問題としても，自己開示の問題を語っていた。そしてそのとき，開示／非開示の選択は，より複雑な戦略的選択を示すことがわかった。A氏に関しては，採用面接時点では高次脳機能障害を開示せず，採用決定後に，タイミングを見計らって開示する／開示しない選択を決定していた。この開示／非開示について，するとしてもいつするか，しないとしたらいつまでしないか，という時期の見定めが問題になってくることは，重要である。また，これはB氏が語っていたことだが，就労する際に，雇用者に高次脳機能障害の説明を具体的にはせず，就業後に徐々に伝えるなど程度を考えて開示している。ここでは開示／非開示について，するとしてどこまでするか，しないとしたらどこまでしないか，という程度の見定めが問題となっていた。

本研究で明らかになった新たな知見は，高次脳機能障害者における開示／非開示においては，心理的な問題だけでなく，「職を得る」などのさまざまな実際的な問題がかかわっていること。その際，何がメリットで何がデメリットとなるか，そのつど見定めながら，場面や状況に応じて戦略的に選択されていること。そして，その選択にはただ開示する／しないだけでなく，開示の時期や度合いの選択でもあったことである。それらを，高次脳機能障害という具体例で明確にした。

Ⅵ．研究の限界と今後の課題

就労場所や高次脳機能障害を有する期間など条件が変われば，違う結果が得られるかもしれない。今回，A氏とB氏の間でも差異がある結果となったが，今後の調査では調査対象を増やすか，あるいは調査方法をより検討したい。

障害の開示／非開示による利益と不利益は，高次脳機能障害をもつ者だけに限らない。利益と不利益は人によって異なるだろう。就労場面における高次脳機能障害をもつ者がおこなう自己開示の戦略はある程度明らかになったが，今回とは異なる場面では違う利益と不利益があると考えられる。開示／非開示で生じる利益と不利益が，相手によって変化するとも考えられるので，今後はさらに属性や条件の異なる者を対象に調査・研究をおこなう必要がある。

また，開示／非開示の選択により生じる利益／不利益について，雇用主と社会の側からも検討する必要があるだろう。個人的な問題だけでなく，制度的な問題にも目を向けていく必要がある。

引用文献

秋風千惠（2013）軽度障害の社会学――「異化＆統合」をめざして．ハーベスト社．

朝比奈朋子（2014）地域生活における高次脳機能障害者の社会福祉としての「障害」の把握――日常生活における困難さを中心に．川村学園女子大学研究紀要，25（2），191-207．

榎本博明（1997）自己開示の心理学的研究．北大路書房．

Goffman, E.（1959）*The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday & Company. 石黒毅（訳）（1974）行為と演技――日常生活における自

己呈示．誠信書房.

Goffman, E.（1963）*STIGMA: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall. 石黒毅（訳）（2001）スティグマの社会学――烙印を押されたアイデンティティ．せりか書房.

橋本圭司（2007）高次脳機能障害――どのように対応するか．PHP 新書.

林眞帆（2014）高次脳機能障害者の社会生活上で生じる「生活のしづらさ」がもつ意味に関する研究――ソーシャルワークにおける働きかけの焦点の明確化．社会福祉学，55（2），54–65.

石元清英（2010）隠蔽される部落と一面的な部落観――カムアウトによる部落の可視化という戦略．関西大学人権問題研究室紀要，59，1–23.

Jason Orne（2011）"'You will always have to "out" yourself': Reconsidering coming out through strategic outness", *Sexualities*, 14（6）: 681–703.

Jourard, S. M.（1971）*The Transparent Self*. Van Nostrand Reinhold. 岡堂哲雄（訳）（1974）透明なる自己．誠信書房.

河井信行・畠山哲宗・田宮隆（2016）脳神経外科医が知っておくべき脳外傷後高次脳機能障害の特徴と診断．脳神経外科ジャーナル，26（3），185–194.

金泰泳（1999）アイデンティティ・ポリティクスを超えて――在日朝鮮人のエスニシティ．世界思想社.

小泉香織・八重田淳（2017）働く高次脳機能障害者の声――質的研究．職業リハビリテーション，30(2)，47–56.

厚生労働省，障害者の雇用，（2019 年 10 月 15 日取得 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jigyounushi/page10.html）

森山至貴（2010）ゲイアイデンティティとゲイコミュニティの関係性の変遷――カミングアウトに関する語りの分析から．年報社会学論集，（23），188–199.

麦倉泰子（2006）「見えない」障害とともに暮らす――高次脳機能障害者の家族負担についての質的研究．関東学院大学文学部紀要，（108），21–37.

西倉実季（2009）顔にあざのある女性たち――「問題経験の語り」の社会学．生活書院.

野島那津子（2015）十分に医療化されていない疾患を患うことの困難と診断の効果――痙攣性発声障害を患う人々の語りから．ソシオロジ，59（3），3–19.

太田啓子（2007）「軽度」身体障害者のライフサイクルにおける困難な場所への対処プロセス――対処方法と障害に関する意識の変容．生活科学研究誌，（6），225–234.

Parsons, T.（1951）*The Social System*. The Free Press. 佐藤勉（訳）（1974）社会体系論．青木書店.

三部倫子（2014）カムアウトする親子――同性愛と家族の社会学．御茶の水書房.

砂川秀樹（2018）カミングアウト．朝日新聞出版.

田垣正晋（編）・赤松昭・古井克憲・今泉佳代子・今尾真弓・稲沢公一・松本学（2006）障害・病いと「ふつう」のはざまで――軽度障害者　どっちつかずのジレンマを語る．明石書店.

山田規畝子（2011）壊れかけた記憶，持続する自我――「やっかいな友人」としての高次脳機能障害．中央法規.

横山和樹・森元隆文・竹田里江・池田望（2014）地域で生活する統合失調症をもつ人における自己開示とセルフスティグマ低減のプロセス．精神障害とリハビリテーション，18（2），174–182.

（受稿日：2020. 7. 1）
（受理日［査読実施後］：2021. 5. 10）

Original Article

Higher Brain Dysfunction and Strategic Self-Disclosure: Focusing on Employment and Dilemmas

Sawaoka Yuki

(Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University)

This paper clarifies how people with higher brain dysfunction, considered an "invisible disability," inform other people of their disability and what they think about when deciding what to disclose and what not to disclose. Regarding disclosure/non-disclosure, research exists on people with "invisible attributes" such as sexual minorities, but self-disclosure in people with higher brain dysfunction (related to social systems) has not been studied sufficiently. In qualitatively analyzed, semi-structured interviews with two individuals diagnosed with higher brain dysfunction, the subjects described "obtaining employment through the people with disabilities employment ratio system" and "obtaining understanding and finding it easier to work" as the merits of self-disclosure. Conversely, there were demerits such as "there is a possibility of being disadvantaged when it comes to being hired." Subjects faced a dilemma in deciding whether or not to disclose their disability. They self-disclose their disability when necessary or to their benefit while considering the circumstances surrounding the disclosure, the other parties involved, and respond strategically, for example, not communicating the details of their situation. With the addition of "disability" to the list of disclosed/not disclosed attributes, self-disclosure is used strategically in "obtaining employment."

Key Words : higher brain dysfunction, self-disclosure, coming out, invisible disability, dilemma

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.44, 1–14, 2022.